

別紙 1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 倉田 信彦

論 文 題 目

Splenectomy in living donor liver transplantation and risk factors of portal vein thrombosis

(生体肝移植における脾摘と門脈血栓のリスク因子)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

柳野正人 


名古屋大学教授

委員

中村 菜男 


名古屋大学教授

委員

内田 広夫 

名古屋大学特命教授

指導教員

小池 聖彦 

## 論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

今回、生体肝移植において、グラフト/レシピエント体重比が 0.8%以上と十分な大きさのグラフトを用いることで、良好な成績を保ちつつ、脾摘の適応を最小限に抑えられることが確かめられた。しかし、十分な大きさのグラフトを使用したとしても、脾摘が有効となる症例が存在するため、脾摘後の主な合併症である門脈血栓のリスク因子を検討することは重要である。今回の検討では、最終門脈圧が低いことが門脈血栓のリスク因子であることが示され、脾動脈径も大きい傾向にあった。こういったリスク因子がある症例では、門脈血栓の早期発見のために頻回にエコー検査を行い、門脈血流を確認する必要があると考えられた。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 十分な大きさのグラフトであったとしても移植後の門脈圧が制御されず、門脈圧制御を目的とした脾摘を必要とする症例が一定数存在することが判明した。また、脾動脈瘤の症例では動脈瘤の破裂予防として脾摘が不可欠である。こういった症例では脾摘が有効な手段であると考えられる。
2. 脾摘後の主な合併症として報告されているのは、門脈血栓と重症感染症である。門脈血栓の予防としてヘパリンの静注を行っているが、出血が原因で中止する症例も少なくない。門脈血栓の早期発見のために頻回のエコー検査が必要である。重症感染症に対しては、術後に肺炎球菌ワクチンを投与している。現在までに肺炎球菌による重症感染症は認めていない。
3. 肝移植において脾摘が有効な手段である症例が存在するため、脾摘後の門脈血栓のリスク因子を検討することは重要である。今回の検討では最終門脈圧が低いことが門脈血栓のリスク因子であることが判明した。また脾静脈径も大きい傾向にあることがわかった。脾摘の症例数が 18 例と少ないため、多変量解析などの詳細な検討がなされていないが、今後は症例数を増やして門脈血栓のリスク因子をさらに検討する必要がある。

本研究は、生体肝移植における脾摘の適応と合併症のリスク因子を確立する上で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

## 試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	倉田 信彦
試験担当者	主査	柳野 弘人	副査 <sub>1</sub>	中村 宗男
	副査 <sub>2</sub>	内田 広夫	指導教員	小沢 聖彦
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 肝移植における脾摘の有効性について</li> <li>2. 脾摘後の合併症に対する対策について</li> <li>3. 本研究の新規性について</li> </ol> <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、移植・内分泌外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				